ケア労働は安い。なぜか。その労働への「我々」の評価が低いからである。その評価を現実に遺漏なくひきうつすかのように、政府は介護保険の利用報酬、事業者は労賃、利用者はそのサービスへの支払いを低く抑えてきたからである。では何故、ケア労働の社会的評価は低いのか。低いだけでなく、安いのか。社会的評価が低くとも高値の労働がこの世界には存在するにもかかわらず、なぜケア労働は低くかつ安いのか。

かかる問題の究明にさいして、大沢真理が提案する「財・サービスを生産し所得をもたらす諸関係」は不十分である。労働（生産行為）と労働力（生産を可能とする力能）を区別できていないからである。であるがゆえに、労働の商品化と労働力の商品化との差異、それが有するインプリケーションへの感度が低いからである。

労働の商品化とは、生産行為（その産物）が市場価値を有する（売買の対象となる）ということである。対して、労働力の商品化とは、生産行為を生産する能力（その主体）が市場価値を有する（売買の対象となる）ということである。後者のポイントは、完全に商品化された労働力は市場以外にその再生産の場をもたないということである。裏からいえば、不完全に商品化された労働力は市場の外にその再生産の場をもつということである。

問題は、かかる再生産条件の違いがもたらす帰結である。完全に商品化された労働力では、その再生産にかかる（最低限の）費用が「適切な」労賃として設定される。対して、不完全に商品化された労働力では、かかる「適切さ」を下回ってもかまわないということになる。そしてこれこそが、謎を解く鍵である。「不完全に商品化された労働力がもっぱら農民・主婦・若者・学生に偏ってきたのはなぜか」、「労働市場において彼女らの労働が安く買い叩かれてきたのはなぜか」といった謎を。

ところで以上は、いうなれば古典的問題である。現代では、問題はいささかその意匠を違えている。まず、いまや不完全に商品化された労働力の範囲は非常勤やパートのケアワーカー、有償・無償のボランティアまでをも覆っている。彼女らは、市場の外にその再生産の場をもつがゆえに、あるいは理念や善意から、多くをもとめることがない。そうして、期せずしてケア労働の価格貶下に加担する。つまり彼女らの誤謬は、道徳的なものではなく、認識にかかわっている。その認識の誤りとは、労働の柔軟化は、労働の商品化にはあてはまっても労働力の商品化にはあてはまらないということである。つまり現代の問題は、労働の柔軟化それじたいではなく、柔軟な労働力が不完全に商品化された労働力と等値され、安値を貼られることなのである。むしろ柔軟な労働は雇用保障がないのだから、正規労働よりも高く売られ買われるべきなのに、である。そこまで欲を掻かずとも、同一労働・同一賃金を要求することには合理的な根拠があるにもかかわらず。

とはいえ、かかる現代の問題があらたな古典的問題となりうる日も、そう遠くない。差し迫りつつある情況――グローバリゼーション――に照らしたとき、「同一労働・同一賃金を実現せよ」という要求はあくまで条件つきのものでしかない。「国内労働市場が閉じているならば」という但し書きを付された仮言命法でしかない。再生産コストの水準がまったくことなる労働力の国内市場への参入を眼前に、ケアを「まともな仕事（decent work）」へと変えゆくには「ジェンダー公正」なる転轍機だけではもはや足りない。